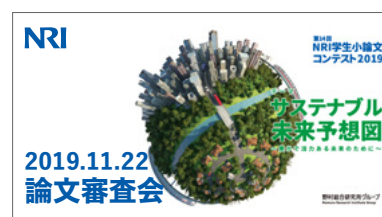


問題発見力や解決策の視野の広さ、独自性、斬新さ、文章力などさまざまな点から評価を行い、議論を経て、最終審査会に進む論文を選定しました



論文審査会に至る経緯は以下の通りです。

- 1次審査:NRIグループ社員102名が論文を評価し、評価が高かった16作品(大学生の部6、高校生の部10)が2次審査に進みました。
- 2次審査:NRI研究理事の桑津浩太郎をはじめとする社内審査委員に加え、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんを含む7人の審査委員それぞれが、16論文を評価・採点しました。



2019年11月22日、NRI東京本社会議室において、7人の審査委員が一堂に会し、論文審査会を実施しました。長時間の議論を経て、上位入賞論文8作品(大学生の部3、高校生の部5)を選定しました。各賞については、2019年12月20日の最終審査会におけるプレゼンテーションで確定します。

### [論文審査会 審査委員]

#### 審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

#### 特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

#### 審査委員

齊藤 義明 未来創発センター 2030年研究室長

八代 夕紀子 プラットフォームアーキテクチャー開発一部 グループマネージャ

小松 康弘 コーポレートコミュニケーション部長

本田 健司 サステナビリティ推進室長

2019年11月22日、NRI東京本社会議室に集まった7人の審査委員によって、論文審査会が行われました。その議論の一部をレポートします。なお、性別・学校名・学年などの応募者情報は全て伏せられたうえで、審査は行われています。

## 大学生の部

### 現代の切実なテーマに真正面から向き合い 実現可能性の高い、サステナブルな仕組みを提案

[論文審査会 対象論文] \*文中での呼称

- ・えらぶのゆきプロジェクト \*「えらぶのゆき」
- ・海洋プラスチックごみで道路を再生 \*「海洋プラスチックごみ」
- ・孤独の解消で始まるサステナブルな未来の土台づくり \*「ファーマーズマーケット」

#### 上位2作品が僅差で高い評価を集める

桑津—評価が最も高かった作品は「えらぶのゆき」で、僅差で「海洋プラスチックごみ」も高くなっています。

#### 「えらぶのゆき」—具体的で創造的なプロジェクト構想

池上—スノードームで南の島に「雪」を降らすという大胆で夢のある発想です。環境問題を楽しく改善させようという提案で、島を訪れた人も喜んで参加しそうですし、私は「えらぶのゆき」を最も高く評価しました。

齊藤—ひと言で言うと、断トツだと思います。島の漂流ごみ、マイクロプラスチック問題に対して、具体的で創造的なプロジェクト構想を展開しています。観光客にごみを拾わせるという逆転の発想を、魅力的なプランに企画化した点も素晴らしいと思います。

小松—問題を抜本的に解決するボリュームにはなりませんが、実現可能性も高く、持続可能な仕組みを提案しています。人の善意を自然に喚起でき、関わった人全てにポジティブな効果をもたらす提案だと感じました。

八代—実際に島に足を運んだ調査には説得力がありますし、完全オリジナルな発想を元にじっくり練ったアイデアを高く評価したいです。文章力も高く、論文としても素晴らしいです。すぐに実行できそうですが、さらに工夫してアイデアを膨らませることもでき、他の自治体にも応用できる、夢の広がるアイデアだと感じました。



審査委員長 桑津 浩太郎



特別審査委員 池上 彰さん

**最相**—島の子どもの活動や島では見られない「雪」に目を留め、やりがいのある楽しいプロジェクトに発展させています。実際にマイクロプラスチックの回収効果を測定している点も説得力があります。

ただ、一時的なものに終わらせないためには、アーティストにデザインしてもらうなど、プラスチックでスノードーム自体の魅力を高める必要があるのではないかと感じました。

### 「海洋プラスチックごみ」— マイナスをプラスに価値転換する視点

**桑津**—次いで評価の高かった「海洋プラスチックごみ」については、どうでしょうか。

**最相**—この提案には、道路の液状化という自らの被災体験を起点に、目の前の問題を懸命に考えた努力を感じ、私は最も高く評価しました。科学的なデータを提示して日本のプラスチックリサイクルの現状を論じながら、問題の多い海洋プラスチックの性質について、マイナスをプラスに価値転換する視点には独自性があります。

海外のプラスチックロードの事例は、おそらく後から探して見つけたものだと思います。ぜひ、日本独自の道路開発につなげてほしいと思いました。

**池上**—世界で深刻な問題になっているプラスチックごみですが、少しでも再利用するという具体的な提案は実現可能性も高く、「そうか、道路にできるのか」という思いでした。自然に返らないということは強いまま残ることだ、という逆転の発想も評価したいと思います。

**本田**—プラスチックごみ問題を、世界に影響を与えている日本の大きな社会問題として捉え、プラスチックを道路舗装に使うというアイデアには、オリジナリティがあります。ただ、大学生の論文としては、少し物足りなさを感じました。

**八代**—プラスチックを資源として活用する事例が、既に世界にこんなにあるとは知りませんでした。前半の問題提起から解決策提示までのくだりは、ファクトを交えた説明が大変わかりやすく、読み応えがあります。

欲を言えば、こんなに素晴らしい解決策がまだ日本で実現化できないのはなぜか、意見や提言が欲しかったと思います。

**小松**—分解しないという性質を逆手に取って、それを資源とするという着眼点を評価しました。プラスチック製道路の製造工程で発生する環境負荷なども含め、ビジネスモデルについても言及してほしかったです。

文章にはやや粗さがありますが、自らの見解をしっかりと述べていて、熱量を感じました。



特別審査委員 最相 葉月 さん



審査委員 八代 夕紀子



審査委員 齊藤 義明



審査委員 小松 康弘

### 「ファーマーズマーケット」——サステナブルに対し、人の在り様に着眼したユニークさ

桑津——「ファーマーズマーケット」については、どう思われますか。

池上——現代の「孤独」について、日本における現状や健康への影響などをしっかり分析している点が良いと思いました。また、海外のファーマーズマーケットに足を運んで調査し、実現可能性を検討している点も評価できます。

齊藤——何より、消費を通して生産者と交流するという、孤独の問題とファーマーズマーケットを結び付けた着想がユニークです。ただ、ファーマーズマーケットを増やすための具体的方策に触れられていないため、着想にとどまっています。その点は残念ですね。

小松——コンテストのテーマ「サステナブル」という問いに対して、環境ではなく人の在り様に着眼した点を評価したいと思いました。提案内容自体はシンプルですが、その仕組みの中に「For you」×「消費」というフォーカスポイントを意識的に組み込むことで、より実効性のあるものになっています。

単なる「ファーマーズマーケット」を提案するのではなく、その特徴を分類し、日本に適用しやすいタイプを抽出した点も評価できます。

### 最終審査会でのプレゼンテーションに期待

桑津——それぞれの評価が出そろったところで、「えらぶのゆき」「海洋プラスチックごみ」「ファーマーズマーケット」の3作品について、最終審査対象論文に選ぶかどうか話したいと思います。

3作品とも評価が高い中、「えらぶのゆき」は審査委員7人のうち4人が1位をつけていて、まずこれは最終審査に進めることに異論はないのではないのでしょうか。

一同——賛成です。

桑津——次に、僅差の「海洋プラスチックごみ」についてですが、この作品は特別審査委員のお二人が高く評価されています。

池上——「海洋プラスチックごみ」は、最相さんは1位、私は2位に評価しています。

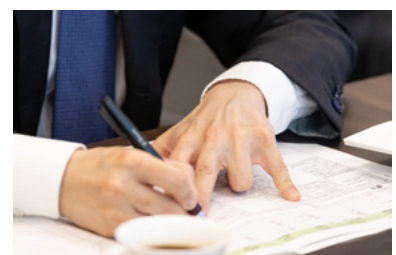
桑津——では「海洋プラスチックごみ」も、最終審査に進めるということによろしいですか。

一同——はい

池上——最終審査で「えらぶのゆき」も「海洋プラスチックごみ」もプレゼンテーションを聞いてみて、最終的な賞をどうするかですね。



審査委員 本田 健司



桑津—次に、「ファーマーズマーケット」を最終審査に進めるかどうかですが、点数面だけで言えば、もう少し上の点数の作品もあります。

齊藤—その作品は特別審査委員のお二人どちらも評価が低いですね。

最相—そうですね。「ファーマーズマーケット」のほうがふさわしいと思います。

池上—「ファーマーズマーケット」で良いのではないのでしょうか。

桑津—わかりました。それでは、大学生の部の最終審査対象作品は、「えらぶのゆき」、「海洋プラスチックごみ」「ファーマーズマーケット」の3作品といたします。

なお、各賞は、12月20日の最終審査会におけるプレゼンテーション審査を経て決定します。



# 高校生の部

## グローバルな視点で 未来へ向けたサステナブルな挑戦を提案

[論文審査会 対象論文] \*文中での呼称

- ・ アフリカの子供達と世界をつなぐ「BUDDY」プロジェクト \*「アフリカの子供達」
- ・ AlaaSで高齢者に給食を、健康でサステナブルな幸福を \*「高齢者に給食」
- ・ AI搭載型献立アプリ「WFD」—スマホで始める食品ロス対策— \*「献立アプリ」
- ・ 未来につなぐ学びの場づくり「未来まちづくりプロジェクト」 \*「地域の学びの場」
- ・ 持続可能な街づくり—住み続けられるまちづくりを実現するには— \*「海上の街づくり」

### 1作品に高い評価が集まり、続く2作品は僅差

桑津—最も高い評価が集まったのは「アフリカの子供達」で、4人の審査委員が1位に評価しています。次いで「高齢者に給食」と「献立アプリ」が同じくらい高くなっています。それぞれご意見をお願いします。

#### 「アフリカの子供達」—行動力に裏打ちされたグローバルな視点

池上—アフリカの子供達と直接つながることで、彼らの成長の手伝いをしながら日本の高校生も成長していく。「可哀そうなアフリカの子供達」というステレオタイプなものの方が覆され、日本の子供達にとって非常に大きな教育になるのではないかと、高く評価しました。ネット環境の発達と新しいアプリによって、新しい形の支援の可能性を示してくれたと思います。

私もアフリカのあちこちを訪れていますが、アフリカは非常にネット環境が発達していて、多くの人がスマホを持ち、子供達も携帯やスマホに触れています。現地の事情を踏まえた、実現性のあるアイデアだと思いました。

小松—仕組み自体は非常にシンプルですが、コミュニケーションを通じて気づきを得たり、マインドセットを変えていこうという提案で、時間のかかる中長期的な取り組みが本質的な解決につながるという発想が心に響きました。

また、具体的な描写が多く、イメージが湧いてくるような文章も大変良いと思いました。



審査委員長 桑津 浩太郎



特別審査委員 池上 彰さん

八代—斬新さには欠けませんが、実際に現地に行った経験に基づく話やグローバル感など、素晴らしい行動力とそれに裏打ちされた問題提起がリアルに伝わりました。今すぐに何らかの成果がある訳ではありませんが、一過性の問題解決ではなく、アフリカの子供達に働きかけることで自律的な経済成長を促すという考え方が、まさにサステナブルな取り組みだと感じました。論文としても、段落構成がしっかりしていて、大変読みやすかったです。

本田—とにかく非常に良くできている論文だという印象で、グローバルなテーマでここまでしっかり書けている論文は今までなかったのではないかと思います、1位に評価しました。自身の経験も織り交ぜながら、具体事例を示してアプリのメリットを分かりやすく論じており、実現に向けたプロセスも具体的です。

最相—「アフリカの子供達」は、私が今回の高校生の候補論文の中でトップ2としたものの1つで、2位に評価しました。ボランティア体験を土台に、「今すぐ自分に何ができるか」を考えた意欲的な論文で、具体例も豊富で、利用している子供達の姿が目につきました。

齊藤—アフリカの子供達と日本の高校生の交流は、アフリカの子供達のためと言うより、むしろ日本の高校生の視野を広げる育成手法として重要な論点を含んでいるのではないかと思います。

ただ、敢えて言うなら、相手側が求めるのは果たして日本の学生なのか、リアルに会っていない者同士が親密につながる効果がどれほどあるのか、という点には課題を感じました。

### 【高齢者に給食】—着眼点のユニークさとオリジナリティ

小松—健康寿命の延伸とフードロス解消、この両者を成立させようという着眼点を評価しました。企業に依存せざるを得ないビジネスモデルではありますが、給食形式での配食、メニュー選定の合理化、高齢者の見守りとの連携など、組み合わせ次第でビジネスになり得ると思いました。

八代—配食サービスや高齢者見守りは既にありますが、より大規模に取り組めば、フードロス問題や高齢者医療問題にもつながるという提案で、「なるほど、すごい」と感じました。高齢者にとっては、大事なインフラになるはずです。

20～30年後に私自身が高齢者になったときには、ぜひ実現していて欲しいとも思いました。論文としての構成も良く、スムーズに読めて説得力ある文章も、高評価につながりました。

本田—自身の祖母に対する体験も踏まえて、AIで高齢者の体調に合わせて給食を作る発想は、高齢者問題と食品の廃棄ロスの2つの問題を解決していて、ユニークさとオリジナリティを感じます。また、今回の「サステナブル未来予想図～豊かで活力ある未来のために～」というテーマに非常に合致した提案で、その点も評価したいと思いました。



特別審査委員 最相 葉月 さん



審査委員 齊藤 義明



審査委員 八代 夕紀子

### 「献立アプリ」——発想の面白さ、独自に考え抜く姿勢

**最相**——今回の高校生の候補論文の中でトップ2と考えたうち、1位に評価しました。この提案は、台所から考える食品ロス対策だと思います。食材や調味料の節約や有効利用、買い忘れ予防、スーパーとの連携で無駄をなくし、本当に必要な人に必要なものを届けられるなど、多くの利点があります。

さらに、食の見える化はダイエットや健康維持にもつながりますし、人間が思いもつかないAIが考えた献立というのが非常に面白い発想だと思います。クッキング番組や今ある献立アプリと連携すれば、食品ロス問題に対して、ある意味で可能性を広げる事になると思います。

**齊藤**——食品ロス問題に対して、自分なりに問題解決に向けたポイントをつかんで、独自のスマホアプリとして具体性の高い機能提案を行っています。その独自に考え抜く姿勢が、他の論文に比較して突出していると感じたので、この論文を一番高く評価しました。事業構想的に見ても、ベンチャーの事業案として種になり得る水準になっていると思います。

\*

**桑津**——ここまでの議論で、高い評価が集まっている「アフリカの子供達」は最終審査に進めることに異論はないと思います。次いで点数として高いのは「高齢者に給食」で、僅差で「献立アプリ」となっています。

**最相**——「献立アプリ」は、私以外にも1位に推している方がいますね。

**池上**——「献立アプリ」は2人が1位に評価しているので、最終審査に進めて良いのではないのでしょうか。「高齢者に給食」は1位に評価した人はいないものの、総合点数は高くなっています。

**桑津**——では、「献立アプリ」「高齢者の給食」、どちらも最終審査に進めるということではよろしいでしょうか。

**一同**——はい。

### 特別審査委員が推す2作品も最終審査へ

**桑津**——続いて、「地域の学びの場」と「海上の街づくり」について議論したいと思います。「地域の学びの場」は最相さんが3位、「海上の街づくり」は池上さんが2位に推していますので、お二人からご意見をお願いします。

### 「地域の学びの場」——地域の未来に対する熱い思い

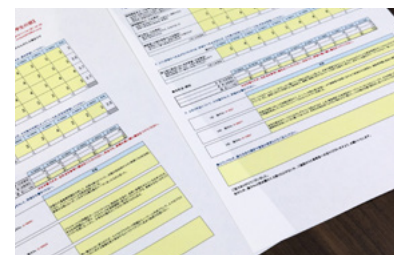
**最相**——ここ数年、全国の地方都市を取材していて感じるのは、高齢化と人口減少の問題が本当に切実だということで、地方に暮らす子供達は、おそらくとても不安だろうと思います。これからの時代、さらに重要になってくる地域ネットワークの土台作りをどうす



審査委員 小松 康弘



審査委員 本田 健司





るか。この切実な問題について、小学生から大学生までつながって、ワンチームになって乗り切ろうとする筆者の真剣な思いが、強く心に響きました。  
ただ、地域社会に住む外国人について触れられていなかった点は残念で、そこが言及されていれば、なお良かったと思いました。

### 「海上の街づくり」——発想の大胆さ、雄大さ

池上——私がこの作品を高く評価したのは、審査基準の「スケールの雄大さ」という軸からです。とにかく、海上都市建設という発想が雄大で、楽しいと思いました。実現可能性などより、まずその大胆さを評価したということです。温暖化による海面上昇に対して、現代の技術を使って解決を図ろうという提案ですが、「持続可能な街づくりには、最新技術を最大限に活用することが不可欠で、人間の住みやすさと自然への配慮を両立する必要がある」という主張から、今後のさらなる技術開発の可能性に期待したいという思いを持ちました。

\*

池上——「アフリカの子供達」以外、特別審査委員2人の評価があまり近くないですね。

最相——一番近いのはどれでしょうか。「地域の学びの場」は結構近いです。

池上——確かにそうですね。

最相——「海上の街づくり」は池上さんがその大胆さを評価されていますので、最終審査に進めて良いのではないのでしょうか。

池上——よろしいですか？

一同——賛成。

最相——それから、特別審査委員2人の評価に近い「地域の学びの場」についても、進めていただきたいです。

桑津——わかりました。それでは、高校生の部の最終審査対象作品は、「アフリカの子供達」「献立アプリ」「高齢者に給食」「地域の学びの場」「海上の街づくり」の5作品といたします。なお、各賞は、12月20日の最終審査会におけるプレゼンテーション審査を経て決定します。





審査委員長

**桑津 浩太郎** NRI 研究理事

今回の「サステナブル未来予想図」というテーマ。サステナブルな地球社会を構築していくために、どんな課題を発見し、新しい技術や考え方を取り込んで、どんな解決策を提示してくれるだろうか、という期待感をもって審査にあたりました。

集まった論文は、環境問題、リサイクル、食品ロスから少子高齢化、地域社会の問題まで、さまざまな問題を取り上げており、大変読み応えがありました。一方で、サステナビリティというテーマの性格上、大胆な課題設定や未来像を描きにくく、斬新な解決策の提示に苦戦する印象も受けました。

審査では、文章力や考えを伝える力はもとより、オリジナルなアイデアで、未来に向けた持続可能なしくみを提示している論文を、最終審査対象論文に選びました。



特別審査委員

**池上 彰さん** ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

高校生の論文については、非常に広い視野でバラエティに富んだ課題を取り上げており、未来性や自由度の高いユニークなアイデアが多く見られました。グローバル目線で課題解決に挑んだ、勢いある作品もあり、今後に期待できるなど大変頼もしく思いました。

一方、大学生の論文については、環境問題や孤独の問題など、現代の切実なテーマに真正面から向き合った、堅実で実現可能性が高い提案が見られた点は評価できるものの、短期的な未来予想図にとどまった、小粒な提案が多い感も否めませんでした。もっとグローバルな観点から、具体的な行動を伴った提案や実践を提示してほしいという思いを持ちました。



特別審査委員

**最相 葉月さん** ノンフィクションライター

今回の審査で気になった点として、前提部分が長過ぎる論文が多いことが挙げられます。字数制限がある中で、問題提起やデータ提示などに文字数を費やしてしまい、後半のアイデアを深掘りできず、論の展開が手狭になっている傾向が感じられました。序章はエキスをとどめ、もっと想像力を羽ばたかせてオリジナリティを発揮してほしいと思います。

また、地域社会にこれだけ外国人が増えて来ているのに、外国人も地域の一員であるということを指摘した論文が全体を通してあまりなかったことが大変気になりました。グローバルというのは必ずしも日本の外に出ることではなく、地域社会にもあるということに、目を留めて欲しいと感じました。



### 審査委員

**齊藤 義明** 未来創発センター 2030年研究室長

大学生の作品は、テーマが環境やリサイクルに偏っている印象を受けました。内容的には具体的提案や実践が乏しい作品が多く、厳しい意見かもしれませんが、受賞レベルに達している作品は大変少ないと感じました。

高校生の作品については、例年よりもテーマに未来性や自由度が増していて、嬉しく思いました。審査においては、単にそのテーマの重要性を述べるにとどまらずに、独自の考察や付加があるものは高く評価しました。



### 審査委員

**八代 夕紀子** プラットフォームアーキテクチャー開発一部 グループマネージャ

高校生の論文はバラエティに富んでいて、読んでいてとても楽しかったです。斬新で面白いアイデアと文章力と、どちらを優先するかに悩みましたが、文章力や伝える力に欠ける作品は減点しました。上位作品には、内容も去ることながら「文章が上手い」と唸ったものを選びました。また、問題解決力よりも「より未来にサステナブルに効いてくるアイデアかどうか」を重視しました。

大学生の論文はオリジナリティを優先して評価しましたが、やはり、高校生よりも実現可能性が高い反面、短期的な未来予想図を描いている印象を持ちました。



### 審査委員

**小松 康弘** コーポレートコミュニケーション部長

一番強く感じた点は、大学生の作品は国内の課題に目を向けたものが多く、グローバルな視点で挑んでいたのは高校生だったということです。「サステナビリティ」というテーマを考えると、大学生にもグローバルな観点で課題を捉えた作品がもっとあればと思いました。

高校生については、字数制限のためか論の展開が手狭で、もう少し踏み込んで論じてほしい印象でした。大学生も、実現性への踏み込みが足りないなど、書き手の主観で終わっていないかどうか、気を配ってほしいと思いました。



### 審査委員

**本田 健司** サステナビリティ推進室長

今回のコンテストは合計2,300もの応募をいただき、特に高校生の部には2,216もの作品が集まったことを大変嬉しく思っています。

評価においては、「サステナブル未来予想図」というコンテストのテーマに合致した提案か、取り上げるテーマにグローバルな視点があるか、自分で考えたオリジナルな提案か、などを重視しました。高校生の作品には、しっかりとしたグローバルな視点で、実体験を踏まえて書かれた、説得力のある作品が見られ、大変素晴らしく感じました。

## 豊かで活力ある未来のために それぞれが思い描く「サステナブル未来予想図」をプレゼン



2019年12月20日、東京・大手町のNRI東京本社大会議室にて「NRI学生小論文コンテスト2019」の最終審査会が行われました。論文審査を通過した8論文（大学生の部3、高校生の部5）の執筆者が全国から集まり、プレゼンテーション審査に臨みました。

審査の開始にあたり、NRI代表取締役会長兼社長の此本臣吾が挨拶。「最終審査に残っている8つの論文は、応募作品2,300の中から選りすぐられた、優れた作品です。これからプレゼンをしていただけるのを大変楽しみにしています。リラックスして、普段通りに話をしてください」と激励しました。



### [最終審査会 審査委員]

#### 審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

#### 特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

梅野 修 共同通信社 常務理事

#### 審査委員

此本 臣吾

横山 賢次

桧原 猛

齊藤 義明

八代 夕紀子

NRI代表取締役会長兼社長

NRI 常務執行役員

NRI 執行役員

未来創発センター 2030年研究室長

プラットフォームアーキテクチャー開発一部 グループマネージャ

# 最終審査会レポート

NRI 学生小論文コンテスト2019

サステナブル未来予想図

～豊かで活力ある未来のために～

2019年12月20日に行われた「NRI学生小論文コンテスト2019」の最終審査会における「プレゼンテーション審査」の様子をレポートします。

\*プレゼンは氏名の五十音順。プレゼン時間6分 + 質疑応答3分

## 高校生の部

### AlaaSで高齢者に給食を、健康でサステイナブルな幸福を

佐野 綾花 さの・あやか 金沢泉丘高等学校2年(石川県)

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=2ObXxP7GBRQ&feature=youtu.be>



高齢者の健康寿命延伸のために、「高齢者」「スーパーなどによる配食サービス」「医療」の3つを、AIの力を利用してネットワークで結びつけることを提案。「給食サービスとAIの力で、サステナブルな幸福を実現したい」と訴えました。

落ち着いた語り口によって、イラストや図表を使いながら具体的な仕組みや高齢者・社会にとっての意義をわかりやすくプレゼンし、提案の説得力を高めました。

#### 審査委員との質疑応答

**Q** — 配食サービスによって、独りの食事「孤食」を解消することがどこまで可能か、そのあたりの知恵があれば、教えてください。

**A** — このシステムでは、独り暮らしの人の孤食は解決できませんが、配食時に配達者と高齢者との間にコミュニケーションは生まれると思います。地元のスーパーとつながることで、毎回同じ人が配達に来るなどして、配達者と高齢者の密接な関係が築けると考えています。

**Q** — 都市部なら配食サービスは可能ですが、小さい商店しかないような地方の過疎地などでは、この仕組みを作るのはかなり難しいのではないかと思います。そのような場所でこの仕組みを作る場合、どのようなサポートがあれば実現しやすいと思いますか。

**A** — スーパーマーケットがないような過疎地であっても、最近はコンビニがある地域も多いので、コンビニでのお弁当の売れ残りなどの食品ロスも問題になってきていることを考えると、このシステムをコンビニで行えるようになればメリットがあると考えています。



### AI搭載型献立アプリ「WFD」 ―スマホで始める食品ロス対策―

玉井 佳音子 たまい・かのこ 中央大学高等学校3年(東京都)

プレゼン動画はこちら [https://www.youtube.com/watch?v=Cmolun\\_0EyM&feature=youtu.be](https://www.youtube.com/watch?v=Cmolun_0EyM&feature=youtu.be)



まだ食べられる物が捨てられているという食品ロス問題に着目し、消費者自身が食品ロスを減らすことをサポートするAIによる献立アプリを提案。様々なデータを交えて、なぜ食品ロスが解決されないのかを分析し、「消費者ができる具体的な対策と意識改革が必要だ」と主張しました。

アプリの機能や効果を丁寧に説明して「消費者が食品ロス問題に向き合えるようになるためのアプリ」であると強調し、実現への期待感を高めました。

#### 審査委員との質疑応答

**Q** ― AIを活用するということは何らかの情報システムが介在しているということで、余った食材の情報などをスマホやタブレットに入力するイメージを持つのですが、何かアイデアがあれば教えてください。

**A** ― 最近では家電にもIoTが普及してきているので、例えば冷蔵庫とシステムをつなげることによって、スマホアプリで食材の写真を撮れば献立の情報が出てくる、といったアイデアがあります。

**Q** ― 人の嗜好は個別なもので、年齢や性別でも変わってきますが、“美味しさ”についてはどのように決めていくのでしょうか。そのあたりもAIで解決できますか。

**A** ― AIは膨大なデータを分析するので、例えば何らかの献立があったとして、それをどんな人が多く見ているのかなどのデータを分析し、それらの情報をもとに献立の内容を充実していけば良いと思います。

**Q** ― 個人によって食事や味の好みは異なりますが、その人個人に合った献立を提案するために、何かアイデアはありますか。

**A** ― アプリを使うたびに、一つひとつの献立に対する評価を入れてもらうようにすることで、その人の好みに合った献立が出てくるようにできるのではないかと思います。



### 未来につなぐ学びの場づくり「未来まちづくりプロジェクト」

宮川 幸己 みやかわ・こうき 本庄東高等学校2年(埼玉県)

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=aFNjiiqkEPv8&feature=youtu.be>



持続可能な未来につながる魅力的な町とは、住む人が自分たちの地域の課題を「自分ごと」として考え、行動する町だという思いから、児童会・生徒会を活用して地域の学びの場を作り、「知る・考える・体験する」しくみを作ることを提案。「人をつなぐ」×「地域の主体的な学び」で、地域への関心と愛着を育てることが必要だと訴えました。自分の住むまち・玉村町への愛が伝わるプレゼンで、「玉村町の夢花火のように、町の未来を自分ごととして考える人の輪を拡げたい」という言葉が響きました。

#### 審査委員との質疑応答

**Q**—地域委員会に選ばれた人は、まちの課題を自分事として考えると思うのですが、地域委員会に入っていない人をプロジェクトに巻き込んでいくためのアイデアや仕掛けはありますか。

**A**—地域委員会が町内で調べたことを学校内で発表したり、地域の伝統文化を体験してもらったりすることによって、地域委員会に入っていない人たちも主体的に行動できるようになっていくと考えています。

**Q**—地域には外国人の住民もいると思いますが、このプロジェクトの中に、外国人の住民はどのように関わってくると思いますか。

**A**—外国人の住民も一緒に地域の伝統や文化を学べるようにすることで、外国人が母国に帰る時にはそれらを持ち帰って、日本の伝統や文化が世界に広まっていくと考えています。

**Q**—若い人達を中心になって町の未来を考えていくというのは、とても良い提案だと思うのですが、この仕組みに問題点や課題があるとすれば、どういうことでしょうか。

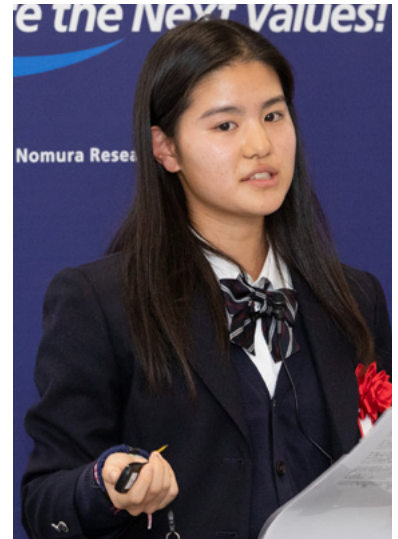
**A**—まず何よりも、玉村町に「未来まちづくりプロジェクト」の提案を通せるかどうか、ということです。



## アフリカの子供達と世界をつなぐ「BUDDY」プロジェクト

森田 輝 もりた・きらり 市川高等学校2年(千葉県)

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=oRcaiqsyPzU&feature=youtu.be>



日本の高校生がアフリカの子供達とテレビ電話でつながることにより、アフリカの子供達が知らない世界に触れ、視野を広げ、豊かな未来を自ら築いていくことをサポートする「BUDDY」プロジェクトを提案。自身のボランティア体験を織り交ぜながら、「アフリカの子供達に直接働きかけることで、自律的な成長を促したい」と訴えました。イラストや写真によって、アプリのイメージや実現へ向けたプロセスを分かりやすく表現し、プロジェクト実現への強い想いが伝わりました。

### 審査委員との質疑応答

**Q** —アフリカの子供達とテレビ電話で会話する時のルールを設定したのは、自身の失敗があったからという話がありましたが、差し支えなければ、どんな失敗だったのか教えてください。

**A** —ケニアで私が活動していた小学校は貧しい地域にあり、孤児や貧しい子が多かったのですが、子供達と触れ合って会話をしている時、つい「あなたの誕生日はいつ?」と聞いてしまったのです。孤児で自分の誕生日を知らなかったその子は、黙ってうつむいてしまいました。気を付けて子供達と接していたつもりだったのですが、そんな失敗をしてしまったため、プロジェクトにおいては会話のルールが必要だと思いました。

**Q** —アフリカ、特にケニアという地域を選んだ理由は、どうしてですか。

**A** —私は小学生の時に父の仕事の関係でマレーシアに住んでいたことがあり、東南アジアの貧しい子供達の現状を知って、将来はそういった子供達のために何かできることはないかという問題意識を持つようになりました。帰国後はユネスコ活動などを通してアフリカの現状を知り、未知のアフリカに行き、現地の人と話してみたいと思うようになりました。アフリカの中でも特にケニアに注目したのは、英語圏なので英語でコミュニケーションできるからです。





## 持続可能な街づくり —住み続けられるまちづくりを実現するには—

米山 太樹 よねやま・たいき 狭山ヶ丘高等学校2年(埼玉県)

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=iCKo6DuQBqo&feature=youtu.be>



地球温暖化による海面上昇で危機に陥っている国があるという問題に着目し、「海の上に持続可能な街を作る」という大胆で夢のあるアイデアを提案。海上都市建設のメリットやデメリットへの方策を示すことで、海上都市の持つ可能性を強調しました。テンポのよい明瞭な語り口によるプレゼンによって、人が住みやすく、自然に配慮した海上の街づくりの実現性を強く感じさせました。

### 審査委員との質疑応答

**Q**—海上都市の話題はあまり報道されませんし、目にすることも少ないと思うのですが、どのように海上都市のことを知ったのですか。

**A**—外国のテレビ番組で、海上の街について放送しているのを見たからです。「海の上に街ができれば色々な問題が解決できるのではないかと」思って調べてみたところから、提案内容を考えました。

**Q**—海上都市のイメージとして、規模や人口はどの程度ですか。また、永住型の都市か、それとも一時的な居住地帯か、という点はいかがでしょう。

**A**—最初の段階では2,500人程度が住めるような規模をイメージしています。2,500人には特に意味はないのですが、私の中で「その程度かな」と思っています。海上都市はブロック状のものがつながっているため、増築することによって多くの人数が住めるようになっていきます。はじめは試しに一時的に住んでみて、そこで見つかった問題点を解決し、次第に多くの人が永住できるような形にしていくことを想定しています。

**Q**—もし日本の海でこのトライアルを始めるとしたら、どこが良いと思われますか。

**A**—断然、沖縄です。海上都市を作る上では、赤道面に近ければ近いほど台風の影響も受けないので、赤道面に近いということから沖縄が適していると思っています。



## 海洋プラスチックごみで道路を再生

大野 いずみ おおの・いずみ 早稲田大学 スポーツ科学部3年

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=NSugO-lm-Os&feature=youtu.be>



プラスチックごみを日本の大きな社会問題と捉え、液状化した街で繰り返される道路工事から着想を得て、プラスチックごみを道路舗装に使うというアイデアを提示。日本の道路事情やプラスチックリサイクルの現状を、多彩なデータによって示しました。「自然に返らないから、強いまま残る」というマイナスをプラスに価値転換する視点には説得力があり、「地球から奪わない資源」としてプラスチックを活用していくべきだという強い想いが伝わりました。

### 審査委員との質疑応答

Q — 東日本大震災による道路の液状化や日本が地震大国であるということと、プラスチックごみで道路を作るということの因果関係は、どのように考えたらよいですか。

A — 特に因果関係はなく、2つの事柄をアイデアとして一緒にしたということです。自分の街の道路ががれきりで覆われているのを毎日見てきた一方で、サステナビリティに関心があって日本の問題とは何かと考えた時、プラスチックごみの問題が大きいと知りました。資源が乏しい日本だからこそ、日本にあるものを資源して自国の産業を支えるという新しい価値観を持つべきだと考えました。

Q — プラスチックで道路を作る際に、乗り越えないといけない課題としてどんなことが考えられますか。

A — 今はまだコストが高いということが挙げられます。

Q — 海外の事例が挙げられていますが、日本の企業の取り組みがないとしたら、どうしてだと思えますか。

A — 私が調べたところでは、日本での取り組みは発見できませんでした。日本では道路のアスファルトは実は98%ほどがリサイクルされているため、プラスチックを道路に活用することは進まないのかもしれないと思います。



### 孤独の解消で始まるサステナブルな未来の土台づくり

中臺 千智 なかだい・ちさと 早稲田大学 政治経済学部3年

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=MlticPtivLU&feature=youtu.be>



「サステナブルな未来を作るには、未来を支える人々が健康であることが必要」という思いと、「孤独は健康を阻害する」という経験から、ファーマーズマーケット文化を広めて孤独感の解消にアプローチすることを提案。「自分を認めてくれる人やものとのアクセスが健康につながる」と訴えました。

イラストを活用して、ファーマーズマーケットの持つ「消費」を通じた「For You」の力を丁寧に説明し、「サステナビリティとは人・コミュニティ・社会とのつながりを可視化することだ」という言葉の納得感を高めていました。

#### 審査委員との質疑応答

**Q**—日本でも道の駅など、農産物を生産者の名前を付けて売っている所がありますが、そういった場所とファーマーズマーケットとは、どんな違いがあるのでしょうか。

**A**—道の駅でも間接的に「For you」の気持ちを受け取れるので、大切な場所ではあると思います。でも、ファーマーズマーケットでは生産者の方と直接コミュニケーションして「For you」を受け取れるので、孤独の解消には一番インパクトがあるのではないかと考えています。

**Q**—物を買うという行為から始まる提案ですが、買うことで「For you」をもらうだけでなく、買った人が次に「For you」をつなげなければ普通の消費行動とあまり変わらないようにも思います。なぜファーマーズマーケットがサステナブルであり得るのか、お金を消費するだけではない何かがあるのか、教えてください。

**A**—1つは、買うという消費行動が孤独の解消につながることで、その人が少しアクティブになり、今までと違うコミュニティに出向いたりすることで、持続可能性が生まれるのではないかと。もう1つは、ファーマーズマーケットは消費する場としてだけではなく、人々の憩いの場や交流の場など、コミュニティとしての価値もあるのではないかと。ということです。



### えらぶのゆきプロジェクト

中吉 聖仁 なかよし・きよひと 鹿児島大学 法文学部3年  
 是石 弘基 これいし・ひろき 鹿児島大学 法文学部3年 (共著)

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=Tns-CtUYnlk&feature=youtu.be>



雪の降らない沖永良部島に、雪のように堆積するマイクロプラスチックごみの問題。これをサステナブルに回収するしくみとして、観光客向けのスノードーム作製エコツアー構想を提案。感謝や善意といった人の心を動機付けとした、継続性・持続性・自走性ある活動が重要であると主張しました。

美しい沖永良部島の写真や、実際に島に滞在して行った調査などが、提案の説得力と実現への期待感を高めました。

#### 審査委員との質疑応答

**Q** — 少し意地悪な質問かもしれませんが、環境活動家のグレッタ・トゥーンベリさんは、環境負荷を考えて移動の際には飛行機は使っていません。このプロジェクトに参加する観光客は、飛行機に乗って沖永良部島を行き来するわけですが、この活動を持続するにあたっての環境負荷については、どのように考えていますか。

**A** — 今回は人間の活動で出てしまったプラスチックごみについて提案しましたが、プロジェクトに参加する人の移動の際の環境負荷までは考慮していませんでした。

**Q** — なぜこのような質問をしたかという、質問に対する直接的な答えが欲しいというわけではなくて、せっかくなので論文を書いたのですから、プレゼンの事前準備の時に2人で想定質問について話し合っておいてもらいたいと思ったからです。

**Q** — 質問ではないのですが、先日あるフォーラムで、環境大臣が「このままでは、30年後の2050年には日本の砂浜は海洋プラスチックごみで埋め尽くされてしまう」と話していました。海洋プラスチックという問題は、海に囲まれた島国の日本にとって非常に差し迫った問題だと思えます。提案を聞いて、皆さんのように問題意識を持った若者がネットワークし、みんなで解決策を考え、活動していただきたいと思います。



# 最終審査結果および評価のポイント

NRI 学生小論文コンテスト2019

サステナブル未来予想図

～豊かで活力ある未来のために～

「サステナブル未来予想 ～豊かで活力ある未来のために～」をテーマとして開催された「NRI 学生小論文コンテスト2019」は、大学生の部3作品、高校生の部5作品の計8作品が最終審査会に進みました。

2019年12月20日の最終審査会において、筆者によるプレゼンテーションを実施し、厳正な審査を行った結果、以下のとおり受賞論文を決定しました。

## 大学生の部

### 大賞

#### えらぶのゆきプロジェクト

中吉 聖仁 鹿児島大学 法文学部3年  
是石 弘基 鹿児島大学 法文学部3年（共著）



#### 評価のポイント

沖永良部島にごみとして漂着するマイクロプラスチックの問題を、南の島では見られない「雪」を降らすという大胆な発想で、「えらぶのゆきプロジェクト」という観光客向けの、スノードーム作製エコツアー構想に発展させている。完全オリジナルで創造的な提案であり、実現可能性の高さや、持続可能なマイクロプラスチック回収のしくみを提示している点が審査委員の評価を集めた。

実際に島に足を運んで行った調査にも説得力があり、論文としての完成度も高い。他の地域への汎用性や発展性も感じられる。

### 優秀賞

#### 海洋プラスチックごみで道路を再生

大野 いずみ 早稲田大学 スポーツ科学部3年



#### 評価のポイント

世界的な脱プラスチックの潮流の中で、プラスチックごみを日本の大きな社会問題と捉え、液状化した街で繰り返される道路工事に着想を得て、プラスチックごみを道路舗装に使うというアイデアを提示。プラスチックの「分解されない」性質を、「自然の影響を受けない」というプラスの価値に転換した視点には独自性がある。

問題提起から解決策の提示に至る、ファクトを交えた説明にも説得力があり、読み応えがある。目の前のことを「わが事」として懸命に考える姿勢が、さらに評価を押し上げた。

### 特別審査委員賞

#### 孤独の解消で始まる

#### サステナブルな未来の土台づくり

中基 千智 早稲田大学 政治経済学部3年



#### 評価のポイント

「サステナブルな未来を作るためには、人々が健康であることが必要である」という思いと、「孤独は健康に悪影響を及ぼす」という経験から、ファーマーズマーケット文化を広めて孤独感の解消にアプローチすることを提案。現代の「孤独」についてしっかりと分析を行い、孤独の問題とファーマーズマーケットを結び付けて、消費を通して生産者と交流するという着想がユニークである。

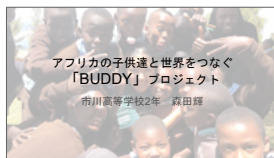
海外のファーマーズマーケットに足を運んで調査し、日本に適用しやすいタイプを抽出して実現可能性を検討している点も評価できる。

## 高校生の部

### 大賞

#### アフリカの子供達と世界をつなぐ「BUDDY」プロジェクト

森田 輝 千葉県 市川高等学校2年



#### 評価のポイント

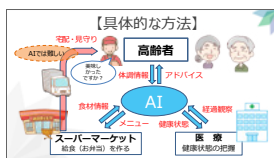
ボランティア体験を土台に、グローバルな視野で「今すぐ自分ができることは何か」を考えた意欲的な論文である。日本の高校生がアフリカの子供達とテレビ電話でつながることにより、アフリカの子供達が、自分の知らない世界に触れ、視野を広げ、豊かな未来を自ら築いていくことサポートするという「BUDDY」プロジェクトを提唱している。このプロジェクトは、一過性の問題解決ではなく、サステナブルな取り組みであることを、高く評価したい。

日本の学生の視野を広げる意味も大きいと思われ、互いに学び合える関係が持続性につながる。豊富な具体例や実現に向けたプロセスが、説得力を高めている。

### 優秀賞

#### AlaaSで高齢者に給食を、健康でサステナブルな幸福を

佐野 綾花 石川県 金沢泉丘高等学校2年



#### 評価のポイント

自身の祖母にまつわる体験を踏まえて、高齢者の健康寿命の延伸のために、「高齢者」、「スーパーなどによる配食サービス」、「医療」の3つを、AIの力を利用してネットワークすることを提案。

すでにある高齢者への配食サービスや見守りサービスを、フードロス問題や高齢者医療問題につなげた着眼点とオリジナリティを高く評価した。「豊かで活力ある未来のために」というテーマにも合致し、高齢者にとって重要なインフラの提案になっている。

説得力のある文章で、論文としての構成力にも優れている。

### 優秀賞

#### AI搭載型献立アプリ「WFD」 —スマホで始める食品ロス対策—

玉井 佳音子 東京都 中央大学高等学校3年



#### 評価のポイント

まだ食べられる物が捨てられるという食品ロス問題に着目し、消費者自身が食品ロスを減らすことをサポートする献立アプリを提案。食品の有効利用、小売店との連携、余った食品を寄付できる場所の提示など、台所が世界につながっているという非常に身近な所から発想し、しかもすぐに始められる食品ロス対策になっている。具体性の高いアプリ機能の提案は、事業案としても種になり得る水準であり、独自に考え抜く著者の姿勢を高く評価した。

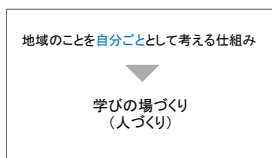
食の見える化は健康維持などにもつながり、人間が思いつかないAIが考えた献立には、さらなる展開の可能性が感じられる。

## 高校生の部

### 特別審査委員賞

#### 未来につなぐ学びの場づくり 「未来まちづくりプロジェクト」

宮川 幸己 埼玉県 本庄東高等学校2年



#### 評価のポイント

「持続可能な未来につながる魅力的な町は、住む人が自分たちの地域の課題を『自分ごと』として考え、行動する町である」という思いから、児童会・生徒会を活用して地域の学びの場を作り、「知る・考える・体験する」しくみを作ることを提案。

高齢化や人口減少の問題が深刻な地方都市において、これからの時代に一層重要となる地域ネットワークの土台づくりについて、真剣に考える姿勢が高く評価された。

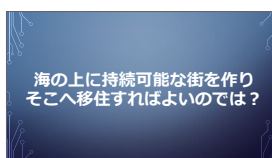
地方に生きる人々にとって切実な問題に対して、子供から大学生までがつながって乗り切りたいという強い思いが響いた。

### 特別審査委員賞

#### 持続可能な街づくり

—住み続けられるまちづくりを実現するには—

米山 太樹 埼玉県 狭山ヶ丘高等学校2年



#### 評価のポイント

地球温暖化による海面上昇で危機に陥っている国があるという問題に着目し、「海の上に持続可能な街を作る」という大胆なアイデアを提案。海上都市のメリット・デメリットをこまかく考察し、実現させる意味を掘り下げている。

何より、海上都市の建設という雄大な発想が楽しい。

海面上昇に対して現代の技術を使って課題解決を図る提案であるが、「持続可能な街づくりには、最新技術を最大限に活用することが不可欠で、人間の住みやすさと自然への配慮を両立する必要がある」との主張から、今後のさらなる技術開発の可能性も期待させられる。



審査委員長

**桑津 浩太郎** NRI 研究理事

今回は「サステナブル未来予想図」というテーマを設定しました。このサステナビリティ（持続可能性）というテーマは、今年だけで終わるものではなく、学生の皆さんが大人になって以降も続くような、永続的なテーマであると捉えています。ですから、今はないものを奇抜な発想で提示するような提案よりは、地に足が着いた、地道な取り組みを積み重ねるような提案が多くならざるを得ない性格の、難しいテーマ設定であったと思います。

プレゼンテーションでは、学生の皆さんの視点や取り組み意志の表明が非常に力強く心に響き、大変感銘を受けました。今後も皆さんそれぞれがこのテーマへの取り組みを継続し、さらに発展させていかれることを期待しています。



特別審査委員

**池上 彰さん** ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

皆さんのプレゼンテーションを拝見して、高校生のプレゼンテーション能力の高さに驚きました。時間におさまるように何度も練習を重ねてきたことがうかがえ、発表スライドもイラストや図をうまく使うなど工夫されていました。

それに比べると、大学生にはプレゼンテーションについてもう少し考えてほしいと思います。せっかくの良い提案なので、スライドの作り方や時間配分など、人に理解してもらうための工夫がもっと必要だと思います。

全体としては、現在そして未来の日本や世界への危機感を共有する中で、若い皆さんが一生懸命考えて、様々な提案をしてくださったことに共鳴するところが非常に多くありました。受賞された皆さん、誠におめでとうございました。



特別審査委員

**最相 葉月さん** ノンフィクションライター

今回のコンテストは、高校生、大学生ともに力作が多かったと思います。特に高校生の作品には、最終審査に残らなかったものの中にも、アイデア自体は非常に面白いものがいくつかありました。

このコンテストには、自分のアイデアがあって、それを文章にして人に伝え、それを言葉で大勢の前でプレゼンテーションするという、いくつもの関門があります。自分が思っていること、想像していること、集めた情報などを、どのようにその場所で表現していくか、ということが問われているわけです。

プレゼンテーションを拝見して、皆さんは非常に高レベルの審査に挑んで来たのだということを実感しています。この度は、受賞おめでとうございました。



# 表彰式

NRI 学生小論文コンテスト2019

**サステナブル未来予想図**

～豊かで活力ある未来のために～

2019年12月20日、東京・大手町のNRI東京本社において「NRI学生小論文コンテスト2019」の最終審査会に続き、表彰式が行われました。

表彰式では、NRI代表取締役会長兼社長の此本臣吾が、9名の受賞者（大学生の部3組4名、高校生の部5名）の一人ひとりに表彰状と副賞を授与。

受賞をたたえる会場からの大きな拍手を、受賞者は晴れやかな面持ちで受け止めていました。



大学生4名、高校生5名の受賞者の皆さん、おめでとうございます！



大学生の部 大賞受賞の中吉聖仁さん（右）と是石弘基さん



高校生の部 大賞受賞の森田 輝（ぎらり）さん

## 大学生の部

### 大賞

#### えらぶのゆきプロジェクト

中吉 聖仁 さん 鹿児島大学 法文学部3年

是石 弘基 さん 鹿児島大学 法文学部3年 (共著)

是石さん

今回の論文をまとめるのは、すごく大変だったという思いがあります。実際に沖永良部島で調査した時は、日焼けし過ぎて、腕がやけどのようになって皮がむけてしまい、とても痛い思いをしました。そういった苦勞があったので、今回大賞を受賞できたことは、非常に嬉しいです。今日は本当にありがとうございました。

中吉さん

大賞を受賞することができ、大変嬉しく思います。沖永良部島は沖縄の近くにあるため日差しが強く、調査は非常にきつかったのですが、夜は地元の方とお酒を飲むなど、楽しく活動することができました。

大学のゼミの先生が厳しく、論文の資料を何度も作り直したのですが、結果的にこのような賞を受賞することができ、感謝したいと思っています。



## 高校生の部

### 大賞

#### アフリカの子供達と世界をつなぐ 「BUDDY」プロジェクト

森田 輝 さん 市川高等学校2年  
きらり

この小論文は、夏休みの課題として書きました。それまで3,000字の小論文など書いたことがなかったので、大丈夫かなと思ったのですが、書いてみると、アフリカについて調べたり、自分の経験をまとめて、「どうしたらアフリカの子供達にとって楽しい未来あふれるプロジェクトになるか」を考えるのが楽しかったです。

実際には字数をオーバーしてしまって削るのが大変でしたが、こうして論文という形に残すことができて良かったと思っています。最後に、家族や先生に「ありがとうございました」と言いたいと思います。



# 懇親会

NRI 学生小論文コンテスト2019

## サステナブル未来予想図

～豊かで活力ある未来のために～

2019年12月20日、「NRI 学生小論文コンテスト2019」の最終審査会・表彰式の後、東京・大手町のNRI東京本社・29階カフェスペースにおいて、懇親会が行われました。受賞者を中心に、そのご家族、特別審査委員、NRI審査委員、NRI役員・社員、これまでのコンテストの受賞OB・OGなど、コンテストに関わる人々が、交流を深めました。



審査委員、NRI社員らと懇談する受賞者たち



共同通信社 梅野さん 特別審査委員の最相さん、池上さんと



NRI社長の此本と



NRI社員、受賞者同士も交流



メディアからの取材



受賞OB・OGも駆けつけて受賞者を祝い、交流を深めた



株式会社 野村総合研究所

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-2  
大手町フィナンシャルシティ グランキューブ  
Tel.03-5533-2111